



みんなの「なんな〜?」を伝えるこども記者のための新聞(毎月1回発行)



信毎こども記者ニュース

発行/こども記者クラブ(信濃毎日新聞地域活動部) 〒380-8546 長野市南県町657 TEL.026-236-3110 FAX.026-236-3193

no.17

むかし いま たい せつ いのち 昔も今も大切な命



富山大成記者レポート



お産婆さんの道具 少なかった

ぼくが一番びっくりしたのは、こんなに少ない道具でお産が出来るかなと思うくらい昔の産婆さんの道具は少ないことです。主な道具はちょうしんきや、アルコールなどの薬です。

今の道具は、お母さんのおなかに当てて赤ちゃんの心ぞうの音を聞くことまではちょうしんきと同じですが、耳に当てずにスピーカーから聞こえるようになっています。

体重計にもちがいがありません。昔は、布にひもをつけた物に赤ちゃんをぶらさげて、



赤ちゃんの体重を測る昔の道具

バナばかりの体重計で重さを測りましたが、今はのせるだけで測れるようになっています。

しかも戦争の時には(戦闘機に爆弾でねらわれないように)、夜は電気を暗くして手元しか光がなかったので、お産はほとんど手さぐりでやっていたそうです。昔には、今にない苦労があると思います。

信毎こども記者クラブは10月9日、大町市の大町公民館で取材教室「戦争中に生まれたいのち」を開きました。県内各地から小学2〜6年生のこども記者11人が参加。大町市の元助産師・太田実子さん(94歳)

や、同市の助産師グループ「SANBAの会」の太田三三子さん、岡田俊子さん、木村節子さんから、昔のお産の様子や今のお産とのちがいを取材しました。

【関連記事10月17日付「こども新聞」に】



こども記者に、当時の産婆さんの道具について説明をする太田実子さん



取材したことを記事にまとめたよ

お産婆さんのお仕事
太田実子さんは太平洋戦争の少し前、1937(昭和12)年に助産師の仕事を始めました。教

室では昔は助産師でなく「産婆さん」と呼ばれていたことをまず教わりました。出産する場所も今とちがいで自宅が普通でした。太田さんは、昔の産婆さんの「七つ道具」を見せながら

体験を語り、こども記者たちも道具を触ったり使わせてもらったりしました。

SANBAの会の人たちは、現代のお産用の道具や赤ちゃんの人形を持ってきて、病院で産むのがほとんどになっている今のお産のここを説明してくれました。

溝口開人記者レポート



今も昔もたくさんの人の力で産

10月9日の取材教室で助産師の太田実子さんに、お産婆さんの仕事について話を聞きました。

昔は今とちがいで、楽な事ではありませんでした。昔はお産婆さんがその人の家へ行って産ませてもらっていました。冬は自転車でいけないので、長いきより歩いて行ったそうです。けれど、今は病院で産んでいます。

昔はお産婆さんが手とちょうしんきだけで赤ちゃんの心臓の音を聞く道具とができました。

赤ちゃんと心臓の音を聞く道具とができました。

今も昔も、たくさんの人の力を借りて生まれてくるのがわかりました。また、お産婆さんとお母さんのすこさを知ることもできました。

講師からの

メッセージ



太田実子さん(94歳)

きょうは良くお話を聞いてくださいました。(戦争のころ)親も子も仲が良かったし、きょうだいも仲が良かったです。お互いを思い合っていました。取り上げた赤ちゃんを、みんな大事に育ててくれましたよ。

赤ちゃんが生まれた時の感動、安心して産ませてもらった助産師の気持ち...自分が生まれた時の、(周りの人の)気持ちを分かってくれたらうれしいです。

短時間によく記事がまとまっていて、感心しました。生まれた子はとっても大事な命です。自分の命がまず大事です。それによって、相手を思いやれます。



SANBAの会 岡田俊子さん 太田三三子さん 木村節子さん



産婆さんの「七つ道具」



太田さんはこども記者の質問に熱心に答えてくれたよ

こども記者のみなさんは、(話を)分かってほしい、いろいろ質問もしてくれました。みなさんは、私たちの職業(助産師)によって生まれた大切な命。元気に育ってください。

